

活動報告書

報告者氏名：禿嘉人

所属：東京都立光明特別支援学校

記録日：2013年2月28日

【対象児（群）の情報】

- ・ 学年：高等部3年
- ・ 障害名：疾患による四肢体幹機能障害
- ・ 障害と困難の内容

地図の概念はあるが、決められたコース以外では自信をもって移動することができない。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい

空間把握が苦手であり、決められたコース以外での校外散策では、出発点に戻ることができないことがあった。そこで、自分の位置情報も表示される地図アプリ「マップ」を利用して、どの場所でも安心して活動ができ、外出時の負担を減らすことによって、自信をもって外出できるようになることをねらいに実施した。

- ・ 実施期間

プロジェクト開始 2012年6月から、主に週1時間ずつ設定している情報A、自立活動の授業中に利用した。

- ・ 実施者

禿嘉人、岩瀬まり

- ・ 実施者と対象児の関係

学年担任、自立活動担当教諭

【活動内容と対象児（群）の変化】

・対象児（群）の事前の状況

対象の生徒は、地図の概念は理解しており、校内では特定の教室を基準に電動車いすを利用して教室間を移動することができるが、基準となる教室以外から出発すると最短距離で移動することができないことがある。また、屋外においても一人で走行できるよう練習中であるが、決められたコース以外では自信をもって移動することができない。

・活動の具体的内容

iPadのGPS機能を活用して、自分の場所を確認しながら移動することによって、道順の理解を促し、安心して屋外で活動できることをねらいに取り組みを行った。iPadを電動車いすに設置されたテーブル上に置くと視線が下を向いてしまうことが多く、走行する際に危険を感じる場面が多かったことから、「どっちもクリップタイプ」（写真）を利用して顔を上げた状態で視線が画面に向かうようにiPadを固定することとした。

・対象児（群）の事後の変化

慣れない場所においても現在地から学校までの経路を検索することによって、学校まで帰ることができるという自信がついて、校外に積極的に出ようという意欲が高まった。また、「どっちもクリップ」を用いることによって、視線が上がり、車いすの走行が安定した。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

「マップ」を用いて学校周辺の散策を行った。まだ、学校周辺の道順を記憶して、どの道路とどの道路がつながっているかということを理解するまでには至っていないが、おおよその方角はつかめるようになりつつある。また、自宅でもiPadを活用し近隣の整骨院を調べ、ヘルパーと外出することもできた。

・エビデンス（具体的数値など）

本人が安心して外出できる距離（本人へのインタビューによる）

事前：約 320m 事後：約 740m

・その他エピソード（画像などを含めて）

車いすのカットテーブルに「どっちもクリップ」でiPadを固定する方法はたいへん好評であった。理由は、画面が見えやすいように角度や高さの微妙な調整を自分で行うことができるためである。また、iPadの角度や高さを調整して、「カメラ」機能を使って写真撮影も自分で行うことができた。屋外での活動において、走行するだけではない楽しみができて本人の意欲が向上した。電動車いすを扱う生徒にとって、カメラの固定法はたいへん重要であり、水平方向への移動は電動車いすで行うことができるものの、上下方向の調整は難しいことが多い。しかしながら、上記で紹介した「どっちもクリップ」を利用する方法だと、ある程度は上下方法にも自分で調整をすることが可能になる。



撮影した写真を確認すると、通常のデジタルカメラを用いるよりもiPadを使った撮影の方が対象物をしっかりとらえた写真を撮ることができていることが分かった。このことから、当初は一般的なビデオカメラを利用した撮影を考えていた文化祭での公開を目的とした学校紹介ビデオの撮影もiPadを利用して行うこととした。

iPadを用いたビデオ撮影での操作は、画面上ですべての操作を行うことができるというメリットがあり、手指の可動域が狭かったり、立体物の操作が困難だったりしても、一人で撮影が可能であった。iPadでは、撮影後の細かい編集が難しいというデメリットもあるが、支援者の力を借りずに撮影を行うことができるというのは大きな意味があった。

これらの取り組みを通して、肢体不自由のある生徒にとって、手軽に扱うことのできる情報端末は非常に有効であることを実感した。卒業後もこうした機器を使いこなして有意義な生活を送ることを強く望む。